

実際、マシュマロ・テストでおやつを先延ばしにできた子どもたちは、様々な戦略を用いていた。手で顔を覆っておやつを見ないようにする。歌を歌って気を紛らわせる。自分の部屋にあるおもちゃのことを思い浮かべるなどが代表的なものである。中には、「待っていればクッキーが2個」とつぶやいては、何のために我慢をしているのかを自分に再確認する子もいた。また、「このおやつが本物じゃなくて、写真だって考えてもいいですよ。額縁に入れちゃうんです」といったヒントを与えると我慢できる時間が格段に長くなる。

もう一つ、ハーバード大学の心理学者であったデイビッド・マクレランドは、1970年代に、領域固有知識の所有を問う伝統的なテストや学校の成績、資格証明書の類いが、およそ職務上の業績や人生における成功を予測し得ないことを豊富な事例で論証している。

例えば、国務省は海外で働く外務情報職員の人事選考を、専門教養、一般教養、語学といった、いわばコンテンツ・テストの成績によって行っていた。ところが、それらのスコアと任地での仕事ぶりや業績との間には、ほとんど相関が認められなかった。コンテンツ・テストのスコアに表れる要素的知識の単なる所有は、質の高い問題解決の十分条件ではなかった。

より大きな影響力を示したのは意欲や感情の自己調整能力、肯定的な自己概念や自己信頼などの情意的な資質・能力であり、対人関係調整能力やコミュニケーション能力などの社会スキルであった。これらは今日、非認知的能力と呼ばれている。

マクレランドの発見は、当然の帰結として企業の人事管理や組織経営、さらに企業に人材を供給する高等教育機関のカリキュラムや評価の在り方に多大な影響を与えている。そして、この動きが次第に初等中等教育にも及んできたのが、近年の状況である。

マクレランドの研究により、すっかりあてになると思い込まれてきたコンテンツ・テストの成績が、実際には将来の社会的成功を十分に予測しないという厳然たる事実がはっきり示された。すべての子どもを優れた問題解決者にまで育て上げる。これが資質・能力を基盤とした教育が目指すところである。

そして、この目標の実現に必要な十分な学習経験は何か。それはどのような学習内容を、どのような教育方法で指導することで効果的にもたらし得るのか。これらの問いに対する理論的・実践的な挑戦が精力的に進められている。

皆さん、何かしら我慢していること、制限していること、ずっと続けていることがあるのではなからうか。こういったマシュマロ・テストのような知識をもっていると、いろいろなときに使える。こういった話は、聞く方の印象にも記憶にも残りやすい。知識の引き出しは、どんどん増やしていきたい。そして、知識は、さりげなく使いたいものである。